

「そろそろ来年あたり、延長は無理かもしれないなあ」

西向きの二LDKのマンションはいくら冷房を強くしても磨りガラスを通る夏の強い陽ざしは容赦なく部屋の奥まで注ぐ。雅之はカーテンを引いた。暑さに加えて部屋の中には重苦しい空気がよどむ。

「年齢的にも単身赴任は健康上良くないし、もう充分働いてくださったし・・・」

雅之のワイシャツを畳みながら珠絵は東京と大阪を行き来する二重生活が十二年に及ぶことに思いをはせていた。

「今まで大学のために産業界と連携して開発してきた大型プロジェクトが一段落したのだからあなたの貢献は大きいんじゃないの？」

「だがなあ、レーザー照射による癌のピンポイント治療は動物実験を経てこれから本格的な正念場にはいるんだよ」

「医学部からのバックアップはないの？」

「難しいなあ、俺の年齢もあるんだろう」

「最高齢の教授は何歳？」

「理事は別として七十四歳になるだろうな」

「それじゃあ、もうそろそろお引き取り願って、っていうこと？」

「まあな、俺より年長の人はいないからなあ」

雅之にはこの東大阪のモノづくりの中小企業が集積するメッカで共同開発した試作品をどうしても実用化させたい商品がいくつもあった。

「その他に腰痛緩和のベッド。眠っている間にコンピューター管理でベッドがゆっくり波状振動して腰の圧迫を防ぐ仕掛けになっている。試作品には百万かかっているんだ」

「本当に効果があるの」

「俺の狭窄症の腰痛が嘘みたいに治ったことが実証だよ。ベッドの腰の部分にあたるところが平らにならないように工夫してある。商品化には一千万円は必要だろう」

国の研究施設を六十三歳で定年退職した後、人生の第二ステージをこの大学に職を得て十二年が経つ。十一月に一年更新がなされるかどうかが決まることになっている。あと一年、一年だけでよいから延長して欲しいと雅之は心底思っているようだ。せっかく立ち上げたプロジェクトを仕事なかばで放り出すのは悔しく残念という気持ちは珠絵にもよくわかる。産学連携という大学と企業との協働事業を立ち上げ、研究補助金の申請によって文部科学省から一年で十二億円の金を大学に調達してきた。しかし、去年は大阪府から下りた二千万円だけだ。文部科学省に十億円の補助金を申請していたが、この大型助成金は通らなかった。このことも一因で大学は雅之にポストを割り当てなかったようである。二月の誕生日を迎え、後期高齢者の仲間入りをして半年が経っている雅之にとって一年更新の

可能性はほとんど不可能に近いのは雅之自身が一番良く知っているはずだ。

「大学で公的補助金が得られない以上、私達の老後を考えるとそんなお金どこから出すの。そんな余裕はないじゃない」

「うーん」

「だれか出資してくれる人はいないの」

「この不景気ではなかなかベンチャー企業に出資してくれる人は少ないからなあ」

厳しかった残暑も彼岸を過ぎる頃にはすっかり秋の空気と入れ替わった。珠絵は週末に雅之のマンションを一ヶ月ぶりに訪れた。十月は雅之が東京に出てくるが多かったためで京都、東福寺の紅葉狩りを二人で楽しむ予定だった。マンションに着くなりさっそく掃除、洗濯にとりかかった。掃除機をかけながら押入を開けると最近はずいぞ見かけることも少なくなった三センチ大の綿埃が布団を動かす度にふわふわと光りの中で舞い上がった。手洗いも風呂場も掃除のやり甲斐があるくらい黄土色にこびりついた汚れが珠絵を待っている。雅之が家事を全くやらないのは今に始まったことではない。

雅之は子供達が保育園児の頃は夕食時に帰宅して一緒に食卓を囲んでも子供達が寝てしまふと車で十五分の職場に戻ってひと仕事をする生活パターンを繰り返していた。そんな夫に珠絵は三人の子育てに追われていてもあえて家事を頼むことはしなかった。その代わりに、子供の相手では保育園の保父さん顔負けの遊び上手だからだ。部屋中にダンボールでジオラマを作って電車ごっこをしたり、外でのキャッチボールやサッカーゲームは汗と埃で真っ黒になって童心に戻る。珠絵が買い物から戻ると部屋中に散乱した夢の島の陣地の中で遊び疲れた子供達と昼寝をしていたこともあった。しかし炊事、掃除となると一切、無関心で「掃除などしなくても人間、死にはしない」が口癖で「誇り」ならぬ「埃」高き男だった。

冷蔵庫を開けると干からびた梅干しがカラコンロンと転がり出てきた。芽の出た皺くちゃなジャガイモは四週間前に珠絵が料理に使い残したものがそのまま残っていた。食材となるものは何一つない。食事に関してはコンビニの大のお得意さんである。独り暮らし用のミニパックの総菜が充実しているらしい。鯖のみそ煮、ポテトサラダ、それにけんちん汁を付けて立派な夕食となる。そして儉約した時間は取り憑かれたように寝ても覚めても新しい事業を立ち上げることに奔走していた。

大学キャンパスのイチョウ並木も黄金色に染まった十一月の始め、雇用更新の通知は雅之に届かなかった。このまま大阪に居座っていても仕方がない。そろそろ決心のしどころか。

年が明けていよいよ退職することが本決まりになった。十二年間とはいえ人生の第二ステージを全力で疾走した数々のイベントが脳裏に浮かんでいるのだろうが珠絵に語ることはなかった。東大阪市の町工場は高い技術力を持つ職人達のメッカといわれる。歯ブラシからロケットまで精密機器を長年の勘と手作業で生産し続けて今日の日本経済の一翼を担ってきた。油の臭いや埃にさえ郷愁を覚える、という雅之の言葉に珠絵はうなずいた。マンションから荷物が出払って部屋の中が閑散としたのを見て雅之は改めて

「ああ、これで大阪に居場所はない」

感傷よりすぐ気持ちを切り替えようという決意が感じられた。

四トン積みのトラックが東京の自宅に着いた時、珠絵は丁度、仕事で留守だった。雅之の携帯電話は台所のテーブルの上におかれたままで、その日の大騒動の一部始終を珠絵が雅之から聞いたのは帰宅してからであった。

一番広い八畳間にダンボール箱が次ぎつぎと運び込まれ天井まで積み上げられた中で雅之は書籍の仕分けをしていた。一番上の箱を取ろうとして持ち上げた途端、腰に「ん？」と不快な鈍痛を感じた。抱えたダンボール箱を放り出してしばらくじっと立っていると次第に痛みが酷くなってくるのがわかる。向きを変えすることもかかむこともできない。珠絵を呼ぼうにもあまりの痛さに脂汗が額から吹き出し、脇の下がじっとりとしてくる。

「珠絵！珠絵！」

雅之はありったけの声を振り絞って妻に助けを求めたが返事はなかった。そうだ、今日は朝から仕事で留守だ。「どうしたものか」少しでも体を動かすと腰に激痛が走る。このままじっと立って様子を見る以外にないか。棒立ちのまま時の経つのがこれほど長く感じられたことはなかった。体は動かなくても思考だけは交錯する。冷やした方がいいだろう。でも台所までのほんの数歩が百メートルにも感じられた。仕方がない。少しずつ右に移動しながらベッドの端まできた。そこで運良く積み重ねられた寝具に寄りかかってずるずるとベッドへ倒れ込んだ。

突然やってきたうしろから腰を強打されたような痛みで雅之は結局、二日間は寝返りを打つことも上半身を起こすこともできなかった。腰から下が「ストーン」と抜け落ちたような感覚もある。四日目ごろから少しづつ楽になり、歩くこともできるようになったので整形外科を受診すると

「椎間関節性腰痛症ですね」

と診断され椎間関節部に鍼を「ポイントで打ってくれた。椎間関節の消炎と鎮痛のお陰で血行も改善され、一週間もすればほとんど痛みは消えていた。「魔女の一撃」のトンダハプニングは雅之に久しぶりの休息の時間を与え、東京での生活スタイルを考えるよい機会となったようだ。

四十四年間の結婚生活の間に三人の息子達はそれぞれの家庭を持ち、再び夫婦二人だけ

の生活に戻った今、二十四時間、同じ屋根の下で暮らして日常の細々したことまで歩調を合わせていかなければならない。この十二年間は東京と大阪を互いに行き来して「お客さんごっこ」の良いところ取りの生活をしていたに過ぎない。雅之はこれまで保たれてきた夫婦の暗黙の均衡が、地響きをたてて崩れ去るのを感じたに違いない。三度の食事すべてを珠絵に頼って、飼いネコのように大人しくしていくのか、とも。いや、「食」の自立が本当の意味の自立であるならば、まず自分の食事は自分で支度することだと考えるに至った。

「新生雅之」の誕生である。朝食にはスペシャルドリンク。冷凍ブルーベリー五十グラム、生姜一片、黒酢二十cc、自家製ヨーグルト五十cc、大麦葉緑素の粉末六グラム、バージンオリーブオイル十cc、蜂蜜適宜をジュースにかけて出来上がりである。昼食には餅、納豆、豆腐、もずく、バナナそして子供のように楽しみにしているのがデザートに毎回異なるプリンを食べること。八十八円のシンプルプリンからチーズケーキプリン、抹茶プリン、紅茶プリンなど一個五百円もする高級品は自分への褒美とした。

珠絵は毎日、同じメニューでも飽きずに続けられる信念の堅さになかば呆れてみているが敢えて買い物も含めて手伝おうとはしなかった。仕事を持つ身にしてみれば安心して家を留守にできるし、夕食以外は支度をしなくて済むからである。しかし、困ったことに台所は一つ、冷蔵庫も一台しかない。どう二人で使い分けるか。いつも四百リットル入りの冷蔵庫は満杯状態である。

夕方、遅くに帰宅した珠絵は夕食に手早くブタ肉のみそ漬けを焼くともう一品と思い、野菜の煮物を冷蔵庫内で探した。確か昨日、沢山作り置きしてどっぷりに入れて三段目に置いたはずなのに消えている。

「ねえ、あなた知らない？」

雅之に尋ねてみる。

「ああ、それ、タッパーに入れ替えて三段目にあるはずだよ」

そう言われて新品の大きめのタッパーを取りだしてみるとちゃんと中に収まっていた。

珠絵は食べ残しはどっぷり容器に入れたままラップをして冷蔵庫へ放り込むのを常としている。電子レンジで温めるときにそのまま使えて便利だからである。一方、雅之は狭い冷蔵庫を効率よく使うために食べ残しが減る度にプラスチック容器を二回でも三回でも変えて積み上げていけば場所をとらずにすむからやり方を変えようと提案した。しかし、そんなことをしたら三センチほどの小さい容器は隅っこへ隠れていつの間にか忘れ去られてしまうだろう。容器で中身を記憶している珠絵は同じようなケースが並んでいると蓋を開けて見ない限りわからないのだ。

「そんな時にはね、容器の手前の見えるところに日付とメモを貼っておけばいいよ」

「小さい容器はまとめて置き場所を決めておけば忘れることはない」

なるほど、

「あなた何年主婦やっていたの。私より家事能力がありそうね」

「ちよっと工夫すれば快適ライフになるといふことさ」

雅之は言い出したらあとへ引かない。フットワークの良さもあいまって珠絵の留守の間に近所の百円ショップで小ささまざまなプラスチック容器を二十個近くも買い込んできた。それらを流し台の脇に新たに作った専用ラックに並べて自分のスペシャルドリンクの残り物だけでなく、総菜の残りものも中身の一つ、一つ点検した雅之はきちんと小ささまざまな新しいプラスチック容器に移し替えて日付と中身を表示するテープを貼った。冷蔵庫の中はすっきりしただけでなく一目瞭然となったのである。こうして雅之は主婦ならぬ主夫の指導力を発揮し始めた。

「ほうら、冷蔵庫の中が広くなっただろう。こんなにスペースができた」

珠絵は雅之の背中越しにそっと覗いてみる。なるほどいまままで満員電車だった庫内がうって変わって片付き、ラベルを貼った小ささまざまな容器が整然とこちらを向いて鎮座している。ゆとりのスペースさえできているではないか。

しかし、面白くない。台所はこれまで珠絵の城ともいうべき不可侵の領域だったはずだ。そこへ雅之流で采配を振るわれたのでは城を乗っ取られた気分である。もつとも、視点を変えて考えてみると、夫が自立して手が掛からなくなったということは、妻には自由になる時間が増えたことではないか。冷蔵庫が広く使えるようになったのは雅之の貢献が大である。「今日のところは名を捨てて実を取るといふことにしておこう」珠絵はにっこりと微笑を返した。

雅之が台所を使うようになってシンク内に置かれた生ゴミの量は増える。食事の支度をする度に屑入れに使っているスーパのビニール袋から生ゴミが溢れ出した。一杯になる度に外のゴミ箱へ持っていく珠絵のやり方に雅之はまたもや抵抗する。

「シンクの脇にすぐ処分できる七十リットル入りのビニール袋を作りつけたからこれが一杯になる三日ごとの回収日に外へ出す」

と宣言した。日曜大工店に日参して一ヶ月後にはシンク脇にゴミ投函器を四機備え付け、生ゴミ、プラスチック、缶、ビン毎に区分けするようにした。行政は分別ゴミ収集を有料で行っている。可燃物と不燃物のゴミは指定の有料ゴミ袋に入れて門の前に出しておけば回収される。その他のペットボトル、プラスチック、ビン、缶、新聞紙、牛乳パック、雑紙類はリサイクルするため週単位に決められた曜日にすべて無料で回収される。

たかがゴミ、されどゴミである。生活をする以上は必ず発生する毎日のゴミ処理問題。

生ゴミをシンク内に放置せず、すぐに外のゴミ箱に捨てたい珠絵と小袋に密閉して七十リットルのゴミ投函器に貯めてからゴミ収集日に出したい雅之。不要品に対する処理方法はつきり別れてしまった。シンク内の水切り籠は大きい方が使いやすいのには雅之は拳大の小さな袋を買ってくるので頻繁に廃棄しなければならぬ。その上、生ゴミのためにわざわざ袋まで買ってくる神経が珠絵には全く理解できないのである。

「いいじゃないか。気持ちよく生活するためなんだから」

珠絵は有料ゴミ袋だって一番小さい十八リットルサイズの安いのか使わない。それなのに雅之は四十リットル用のたっぷりサイズを買ってきて惜しげもなく使う。男と女、こゝも金銭感覚が違うのか。

「生ゴミも臭わずに簡便に家の中で処理できると自画自賛する雅之であった。」

ある日、

「納豆のパックはプラスチックゴミでいいの？それとも生ゴミなの？」
と聞かれた珠絵は一瞬、言葉に詰まった。今までおおよっぱに気分任せて分別していたからである。納豆のように洗っても落ちにくいものはプラスチックでも可燃ゴミとして廃棄するよう行政では指導している。主体的住人を自認する雅之はプラスチックゴミ、可燃ゴミを分別するところから学習を始めたが、広報誌のガイドブックに首っ引きで一ヶ月もすると可燃物カリサイクル可能なプラスチックゴミか、はたまた応用も効くようになり律儀に分類しているうちにゴミについては何でもござれのゴミ博士になってしまった。もともと理系の人間なことでとん極める雅之は「私、食べる人、君、ゴミを出す人」のように他人事ではいられなくなったのである。

そして収集日には、ゴミカレンダーを確認するとさっさと生ゴミ投函器に入っている七十リットル入りの重たくなったビニール袋を束ね、回収用有料ゴミ袋に入れて門前に行く。これは親切というより珠絵がゴミ袋をケチって頻繁に出さなくなったため自ら行動するようになったのである。

さて、ゴミ問題は珠絵が一步譲って雅之流に従ったので生活もスムーズに運ぶようになって三ヶ月が過ぎた。高齢者にとっては規則正しい運動が筋力の衰えを防ぐ上で有効であるとの情報を仕入れてきた雅之は最寄りのフィットネスクラブに通うと言い出した。もともと職場のサークル活動ではテニスが続けてはいたがこの半年間、運動らしい運動をしていないため体重が増えてきたのも決断を後押しした。週に三回はマシーントレーニングと水泳で汗を流してくる。その度にウエットスーツや着替えも自分で洗濯機を回して物干し竿に干している。しかし、これは始めから自分で率先してやっていたわけではない。洗濯は週に二回、まとめてする珠絵の洗濯日に合わないために自ら洗濯して干すようになった

だけである。

「お宅の御主人、マメねえ」

回覧板を届けにきた隣りの奥さんは丁度、二階のベランダで洗濯物を干す雅之に目が留まった。珠絵は振り返って二階を見上げて

「えっ、ええまあ、おほほほ・・・」

夫を尻に敷いているなどとは思われたくない。その雅之の物干しの仕方は自分の専用タオルを竿に二つ折りにして重りをつけて干すのである。乾いたときにはアイロンでプレスしたようにピンと張っている。

「気持ちがいいじゃないか。俺のタオルはこういうやり方で干してくれ」

と注文が出された。寝具のシーツもこの方法で干すとホテルのシーツのようにアイロンをかけたようにピンピンになる。珠絵は母親にも教わらなかったクリーニング屋様を夫である雅之に指南されたのである。

主婦業に進出してきた雅之であるが掃除と夕食作りには全く干渉してこない。夫が掃除機をかけたことは一度も見たことはないし、朝昼は自ら用意するのに夕食は珠絵が仕事で遅くなり予定の時間を一時間以上過ぎてても出来上がって、呼ばれるまでひたすら待っている。

「早くしてくれ」

とも

「手伝おうか」

とも言わないで自室でパソコン相手に趣味の碁をさしている。

いつしか街路樹の銀杏が落ちてあちらこちらで独特の臭いを放っていたが、そろそろ朝晩は暖房が恋しい季節がめぐってきた。北向きの台所のフローリング仕様は特にテーブルの下が冷える。台所を出たり入ったりしてこまめに動き回る珠絵は寒さ対策にフリースを着込んだ上、靴下は二枚重ねて防寒に余念がない。

それに対してテーブルに向かってじつと座っていることが多い雅之は

「脚が寒い」

「厚手の長い靴下を履いたら・・・」

珠絵の提案には上の空で雅之は全く別のことを考えていた。

「テーブルの下の四方をこたつ式にドレープで覆えば暖かくなるかも知れない」

床にはホットカーペットが敷いてあるのでその熱を逃がさないように布を垂らせば保温できるという発想である。またしても雅之の出番となった。

百円ショップで九十センチ幅のフェルト地を沢山買い込んできてテーブルの周囲に暖簾のように床までたらしした。食事の時にはその暖簾の間にこたつのように脚を入れて「温か

い」と相好を崩している雅之を見て、はたまた次は何を発明してくれるのかと秘かな期待を寄せるようになっていた。

「来年の正月には翔太一家が泊まりに来るそうよ」

「そうすると部屋が足りなくなるか」

「悠二の部屋があるじゃない」

「でも、二十年間の汚れが目立つなあ。模様替えをするか」

早速、近所の工務店二軒に見積もりを頼んだところ九十五万、安くても八十万かかるといふ。

「いっそ、俺がやるか」

「ええっ、私の手はあてにしないでね」

「大丈夫だ。少しずつ出来るところから始めていくから」

「天井はどうするの」

「天井の張替えは難しいからペンキを塗るんだな」

「壁紙と絨毯は」

「壁紙は前に一度張り替えただろう、子供部屋を」

「そう、あの時は悠二が手伝った」

「最近は糊がついた簡単に貼れるものが出ているから」

「そういわれてもまた」

「ちよつとここ持ってきてくれ」

などと呼ばれるのは目にみえている。

師走の半ばに入ってリフォームは仕上がった。カーテンや絨毯を新調して天井のしつくにペンキを塗ると部屋は見違えるように明るく住心地良さそうだ。翔太一家を受け入れる準備は整った。

仕事がある日の珠絵は朝が早い。食後のシンクに溜まった洗い物を横目で見ながら

「悪いけど洗っておいてくださる？」

との問いに二つ返事で

「ああ、いいよ」

と雅之。

「今夜、会合があるから夕食は外で済ませてくるけど あなたはどうする？」

「心配するな、適当にやるから・・・」

珠絵は内心、「しめたー」という勝ち組の気分だった。夕食を自分で作らせるチャンスなのだ。うまくすると習慣づくかもしれない。

翌朝、ステップも軽く台所のシンクの前に立ってみると、

「負けた！」

悔しいけど夫がやる家事仕事は四十年以上主婦をやっている珠絵より確かに清潔で徹底している。シンクに一点の汚れのあとも見あたらなかった。

雅之は「濡れ落ち葉」どころか、落ち葉に羽根が生えて自在に飛んでいる。

了